

---

# high school love life

楓揮

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

high school love life

### 【Nコード】

N9920F

### 【作者名】

楓揮

### 【あらすじ】

なかなか入る事が難しいと言われる名門校に入れた智也何故入れたのか不思議になりながら、高校生活がスタートそんな智也に色々な事件が

## 1 - 1 (前書き)

初めて書く小説なので楽しんで貰えるように書きました。これを読んで貰えて少しでも喜んでもらえたら嬉しいです。

俺の名は、かんぞまき神崎 ともや智也

いよいよ今日から高校生活が始まる

美男美女が集まる聖徳薔薇学園に入学が決まった。

俺は、頭が良くなければ

顔もそれ程良くない

そんなもって

競争率が高い名門高に決まったのだ！

何故、この学校に入れたのか

分からない

頭を抱え込みながら、

何処のクラスか調べていると

後ろの方から

聞き覚えのある声が

『ともや〜』

俺が振り返るとそこには

幼なじみの藤崎 あゆみ歩美が腕を上げて

大きく手を振りながら呼んでいた。

歩美はかなりの美人で

しかも頭が良いときている。

『歩美もこの学校なんだ!』

と、俺が言つと

『智也と一緒に学校にしちゃった  
と満面の笑みで答える歩美』

『一緒に学校にしちゃったって歩美だったら、楽勝だろう!』と俺  
が言つと、

『それが大変だったんだよ!』

色々だね　　そう言えば、何でこの学校に入れたんだろうと思っ  
ていたでしょ』

と、歩美が言つ

さすが長い付き合いだ!

俺の表情をみて、ずばりと当ててくる。

それもそのはず、家は近くも近く隣同士で、小学、中学と同じ学校  
だった。

しかも、夏休みになると俺の家族と歩美の家族で良く旅行に出かけ  
る事が多くて隅々まで知っている中だった。

俺は『正直、何でこの学校に入れたのか分からないんだよね

歩美みたいに頭良くないし』

と言ったら、

歩美は笑いながら

『そのうち分かるよ 智也とクラスも一緒だね 早く行こう』

と、俺の腕を引っ張っていく

俺は、頭の上に？マークが

いっぱい浮かんでいたが

まあ、そのうち分かるなら良いかあと思っていた。

俺と歩美は1年5組。

教室に入るなり、

『智也と同じクラスで良かった』とまたしても天使のようなスマイルをして笑ってる。

俺はもうこの笑顔に慣れてきてたから大丈夫だが、他の奴らにしたらいちコロで悩殺もんだなあ！

と、思うくらい可愛い笑みを浮かべてる。

そこに、聞き覚えのある声が

『そこのお二人さーん、俺も仲間に入れてーなあ』

2人で声のする方に振り向くとそこには、俺の親友である

またしても、美男子の工藤 猛

(くどう たける)が立っていた

『おまえもこの学校だったんだ』  
と、少しテンション低めで言う

『そんな残念そうに言うなや』  
猛が言い出す

それを見て、歩美も俺も猛も  
笑いだす。

『でもまだこの学校に入れた事が正直分からないんだよね』  
と俺が言ったら

猛と歩美が顔を見合わせ  
また笑いだした。

俺には何がなんだか  
分からなかった

そんな話をしていると、始業のチャイムが校舎内を響きわたる。

ドアが開き、先生が入ってくる

『はあ、いい、みんな席について』と先生が話し始める  
ザワザワしていた教室が  
一気に静まり返った。

『今日からこのクラスを担当になった葛城 淳子です。みんなヨロ  
シクね』

と明るいう淳子先生

正直この時、俺は

(こんな先生で大丈夫か?)  
と思っていた。

『それじゃ、みんな体育館に移動してね』  
といつまでも明るいつつ  
いうか

陽気な先生だ。

体育館に集まり、何事もなく始業式は終わった。教室に戻り、各々が合いそうな奴らと話をしている。

俺はかなりの人見知りをしてしまうタイプなので、中にとけ込めずにいた。

やる事もなく一眠りしようとした時、後ろから歩美の音が

『また病気発生患者発見!!』

俺の後ろで歩美が言っている。

中学の時もいつも言ってくる。俺が寝ようとする時、何処からかやってきてこのように俺を起こす。

『うるせーなあ、良いだろ別に』  
そう言いつつ、  
歩美が

『つまらないなあ〜』

と、膨れた表情をする。

この顔には

どうしても勝てない俺で

あるからして、ついこの言葉が出てしまう。

『分かったよ！しゃーねーな』

と、言うて決まっ

て、歩美ははしゃぐように喜んでくれる。

端からみたら、

単なるバカップルに見えるだろう！

でも、付き合ったりしてねえぞ

猛と俺と歩美で

色んな話をしていた

中学の事や子供の時の出来事や時間を忘れて話に花を咲かせていた。

そんな時、

先生がなかなか来ない事を

不思議に思った俺は、

『なあ、始業式終わったのに先生遅くねえか？』  
と2人に問いかける。

2人は息ピッタリに

『さあ〜なんでだろう』

と言ってきた。まあ、良いかと思いましたが

戻そうかと思っていた時に

教室のドアが勢いよく開いた

『ごめん×2、用意が遅くなって』  
と、慌てて入ってきた先生だった。

タイミング良すぎだろ

まさか、狙ってた？

んなことねえか。

な事を考えていたら、いきなり先生が

『それじゃ、まず初めにみんなで自己紹介しましょう』

と、言い始めた。

(おいおい、ここは小学校じゃないんだから)  
と思っていたが、

1人だけやたらウキウキしてる奴発見！！

歩美だった！

『先生、良いね』

超、乗り気だあ

この先思いやられる(泣)

各々、自己紹介が始まった。

趣味の話をする奴

名前しか言わない奴

やたら自信があるのか

5分くらい自己紹介する奴

そして、俺の番になった。

『神崎 智也です。よろしく』  
と一言言って座ろうとしたら  
何処からともなく

『短いぞお〜』と聞こえてきた

その声の主は歩美だった。

(面倒くせいなく)と思いながら、

『俺はA型で、双子座生まれで、ええーと趣味は特に無しこんな感じで良いかな?』

と言うと、歩美は満足したのか首を縦に振っている。

歩美も、猛も自己紹介が終わり、面倒くさい自己紹介タイムが終わった。

(なんで高校にもなって、こんな事しなくちゃイケねえんだよ)  
と思い、ムスツとしていたらまた陽気な淳子先生が  
『みんな自己紹介終わった所で席替えタイム』

あんだ合コンでもしに来たのか?と言いたいくらい  
ノリノリで先生は紙に何か  
書き始めている。

不安になり、ある方向も見てみるとやっぱり!と思っくくらい  
もう1人ノリノリの奴と  
またお祈りしてる奴が…、

歩美と猛だ！

(歩美のノリノリは良いとして猛はなんで祈ってた？)

と、思っていたら

先生が作った

アミダクジが書いてある紙が回されてきた。

適当に好きな所に俺の名前を書く

全員書き終わったらしく、その紙が先生の手の中に渡された。

先生は、黒板に をやたら書いていく

ルンルン気分で

先生は気分が良いらしい！

全員の名前を書き終えた先生が

『よおしく、このように席替えしちゃって』

と、言い放つ。

なんと、

隣には歩美、前には猛の席になった。

良かったのか、悪かったのか  
分からない席替えになった。

席替えが終わり、

一息ついていると

隣の歩美が

『隣同士になれて良かった』

と言ってきた。

『そつだな』

と軽く流すと

『嬉しくないの？こんな美人が隣なのに（笑）』

と軽く冗談を言って

お決まりのエンジェルスマイル

と、こんな感じで  
初日が終わり、  
帰る支度をしていると

歩美が  
『一緒に帰ろう』

と言ってきた。

俺は、  
別に一緒に帰る人もいなく  
『良いよ』

と、言い帰る支度を始める。

その時、  
『1年5組の神崎 智也君 大至急職員室に来て下さい。』

とのアナウンスが…

何故呼ばれたのか分からず  
歩美に

『俺、なんかしちゃったけ』  
と聞いたが、歩美も首を傾げるだけで分からない様子

急いで職員室に向かう。

職員室のドアを開けると同時に先生の視線が一斉に俺の方に

飛んできた。

(おいおい、なんだよっ)  
と思いつながら、職員室に入る。

『失礼します』

『神崎きたか！まあ、こっちに座れ』

と、声を掛けてきたのは  
生徒指導部の田中先生だ！

『なんで呼ばれたか分かるか！わかるか？』

と聞かれて、

全然予想もつかない

『なんですか？』

と俺は分からないので聞いた

『今朝、学校宛にこれが届いたんだ。』

「これなんですか？」

と俺は全く分からず聞いた

『これは、入学届けだ』

と先生が言う

俺は思わず、入学届けを手にし穴が開くんじゃないかと言っくらい見渡した。

そんな姿をみて

怪しむ先生！

『おまえが送った物じゃないか？』

と、先生が言い放つ

俺はその時

とっさに思いついた嘘をついた『もちろん僕ですよ！ ちゃんと届いて良かった』

と言つて、その場を切り抜ける

『そうか！ こんな事異例だったから、始めビックリしたのだが、ここまでのやる気があると云うことで、入学決定したんだ！ まあこの事は特例だから他の奴には言っなよ！ 良いなあ！』

と、先生がちよつとムツとして云う。

俺は、すかさず

『分かりました。ありがとっございました。』

と言つと

『話はそれだけだ！ もう帰っていいぞ』

と先生が云う。

俺は何がなんだか分からないまま職員室を出た。

頭の中で、

( 誰が…、何の為…、何故に…、 )  
を繰り返すだけだった。

急いで、歩美が待っている  
教室へ向かう。

何がなんだか分からなくて  
歩美の顔を一刻も早く  
見たかった。

教室に向かいながら、  
心の中で何度も

(どうした俺、何をビビってた！少し落ち着け)

と言いかけた。

教室のドアを開けると…

もうそこには、歩美は待ち疲れたのか机に伏せて寝ている  
歩美がいた。

俺は、歩美の寝ている姿を  
見た瞬間、なんかホッとした。

起こさないように  
教室から出て、

学校に置いてある  
自動販売機へ向かった。

もう少しで着くと言う所で  
思いもよらない奴から

声をかけられた。

『ともやく、なにしてるの?』

俺が、振り向くと

優美が立っていた。

優美とは、

歩美の大学の親友だった。

優美とも小学、中学一緒だったが、歩美と一緒にいる時にしか話をした時が無かった。

『優美！おまえもこの学校だったんだ！』

『そつだよ！智也もこの学校だなんて知らなかった。ここで何してるの?』

『ちよつと、喉乾いたからジュース買いに』

と言つと、

優美は、

『そうなんだ 私はこれから部活だからじゃーね』

と言って俺の前から

立ち去った。

優美も一緒だったとは、

思わなかったと

思いながら自販機に向かって走る。

暖かい紅茶を2つ買って  
急いで教室に戻る。

教室に戻ると、

まだ歩美は寝ているようだ！

そおーと、

歩美に近づき、

『ごめんなあ、待たせちゃったな』

と言つと、

歩美は起きて

『大丈夫だよ！智也は大丈夫だった？』

『あぁー！帰ろうか』

と言つと、

すかさず、歩美の得意技

エンジェル スマイル炸裂！！

危なく、今日は効くところだった。

歩美が帰る支度が終わるのを

見計らつて、さっき買ってきた紅茶を渡す。

すごく嬉しかったのか、

満面の笑みで

『ありがとう』

と言われた瞬間、

心地よい風が吹いてきた。

学校から出た俺と歩美は  
たわいもない話で盛り上がっていた。

学校から家までは電車通学で、二駅行った所にある。

駅に着き、帰りの電車を探す俺『えーと、18時35分着か』

今の時間は、18:00

『35分も待つてなきゃいけないのかあ…』

と言つと、

歩美が

『そのベンチに座って待つてよう』

と、笑顔で言ってきた。

『そつだな』

と一言だけ俺は答える。

そこまで立派な駅ではないが、  
無人駅でもない。

ごく普通の駅だ。

俺が座ると同時に

『今日は災難だったよ。変な先生が担任だし、猛と一緒にのクラスだ

し、変な入学届けが送られてきて怒られるし、』

と俺は思わず漏らしてしまった。

それを聞いていた歩美が

『猛君優しいじゃ、私好きだなあ　あ、…変な意味じゃないよ』

(誰も疑ってないぞ。なんだその焦り…?)

と思いつながら、俺は

『分かってるよ』

と返事をする。

『それに、変な入学届けって何？怒られたの？』

と不安そうに聞いてきた。

『すげー怒られたわけじゃないんだけど、異例の事で正直ビックリしてたみたいだよ。でも絶対誰にも言うなよ！』

『智也が嫌がる事はしないから安心して』

と歩美が言う。

それを聞くと

俺は凄く安心した。

と、同時に電車がきた。

『それじゃ、行くか！』

『うん』

と電車に乗り、家路に向かって帰っていた。

1 - 3 (後書き)

次は、歩美の視点からの気持ちです。

(智也と一緒にクラスのなれて良かった　しかもあるい先生だし、  
高校生活楽しくなりそう！)

と私は思いながら、

帰る支度をしてると、

智也はまだ帰る支度をしてなかった。

(智也の事だから、まだ一緒に帰る人とか居ないんだろうなあ)

と思い、

私は智也に声を掛けたと言うより、無意識にかけちゃった。

『一緒に帰ろう』

嫌がるかなあ〜と

思っていたんだけど、

『良いよ』

と、智也が返事したあ

おお！今日は素直に聞いた。中学の時だったら、

『小学生じゃないんだから』 『1人で帰れないの？』

と言われたのに！

私は、嬉しくなって

笑顔になっていると

『1年5組 神崎 智也君 大至急職員室に来て下さい。』

と、アナウンスが流れた。

(ええ、滅多に言うこと聞かないのに)

と、私が思っていると智也が

『俺、なんかしっちゃったけ』

と聞いてきた。私も分からないから、首を傾げるぐらいしか出来なかった。

そしたら、智也が一瞬不安そうな顔つきになった気がしたら急いで、教室を飛び出ていった。

1人ぼっちになってしまった

どうしようと考えていたら、

途方に暮れていった。

待ち続けて

どのくらい経ったのだろう。

1人はつまらないなあ

周りも暗くなってきた

ちよっと、疲れちゃった

意識が朦朧としてきた。

『ごめんなあ、待たせちゃったな』

と声が聞こえた。

(私、いつの間にか寝ちゃっていたんだ)

目を開けてみたら、

そこには智也が立っていた。

凄く嬉しくて即答で

『大丈夫だよ！智也は大丈夫だった？』

と聞いたら、

『ああ〜！帰ろうか』

と、照れくさそうに言ってきた

そんな智也の姿を見て、

(結構可愛いところあるじゃん)

と思つて、緊張の糸が切れたみたいに笑っちゃつた。

そしたら、智也が何故か照れてるような感じに見える…

気のせいかな？

早く準備しなくちゃ！

よおーし、準備OK 帰ろうつとした時、

智也が背中から缶ジュースを

出してきた。

(おお〜マジック!!な訳ないかぁエヘッ)

無言で渡してきたが、  
ちよつと、照れてるようだった。

私はまた凄く嬉しかったから、満面の笑みで、

『ありがとう』

と言つ言葉が素直に出ちゃった。

その瞬間、

心地良い風が吹いてきた。

学校から出て、たわいもない話で盛り上がっていたが、  
一ツ気になることが、

(何、言われたのだろう?)

(笑っているけど、無理してるような感じがする…)

私らは、駅に着くと

智也が

『えーと、18時35分着か』

『35分も待たなくちゃいけないのか…』

と、困った表情をしてる。

私は、

(やっぱり何か凄い事言われたんだ!)

と思つて、何か力になりたいと思ひすかさず、

『そのベンチに座つて待つてよう』

と言つたら、

『そつだなあ』と、力無い感じで答えてきた。

私と智也がベンチに腰掛けようとした時に、

『今日は災難だったよ。変な先生が担任だし、猛と一緒にのクラスだし、変な入学届が送られてきて怒られるし、』

と智也が小声でグチってきた。  
とっさに

(元氣つけてあげなくちゃ)

と私は思い、『猛君優しいじゃん！私すきだなあ あ…変な意味じゃないよ』

と言った瞬間、

智也の顔がはっ？みたいな顔をした。

(私なに言ってるんだろう、私のバカ)

と自分を責めいたら、

『分かってるよ』

と智也が言ってきた。

さっきの発言を無かった事にするように

『それに、変な入学届けて何？怒られたの？』

と凄く不安になり聞く。

そしたら、智也が重い口が開いた。

『すげー怒られた訳じゃないけど、異例の事で正直ビックリしたみたいだよ！でも絶対誰にも言うなよ！』

と智也が真剣な顔して  
言ってくるから、私もビックリしちゃった。

『智也が嫌がる事はしないから、安心して』

とすぐに私の口から出た。

それを聞いた智也は  
凄く安堵の表情になったのを  
確認できた。

それをみた私も肩の荷が下りたようにホッとした。

それと同時に電車がきて、

『それじゃ、帰ろっ』

とリードしてくれた。

いつもの智也に戻って良かったと言つのと、私が智也の支えにならなくちゃと思つて、

『うんっ』

と答え、智也と私は家へと帰っていった。

## 1 - 4 (後書き)

この次は、また智也の視点になります。まだまだ続きますので楽しんでください。

次の日になり、

4月と言ってもまだ朝は寒い。

下から親が起こす声が聞こえる

『智也！もういい加減起きなさい！』

『あと五分経ったら起きるよ！』

と言つと

『もう子供じゃ無いんだから……』と母がぶつぶつ言いながら、奥へ入っていく。

俺がまた寝ようとした時、

『ピンポーン』と、

インターホンがなった。

俺は早く寝なくちゃ！

と思った。

何故、

そう思ったかと言つと、  
嫌な予感がしたからだ。

かなりのスピードで

《ドンドンド…》と  
階段を上がってくる音が聞こえる。

そしたら、

《ドンドンド…ドテン》

と、音がした。

(間違いなく転けたなあ。あの音は痛そう。)

と、思った瞬間！

俺の部屋のドアが勢いよく

開いたと同時に思った通りの人物が、

『いたかった…！ もう、ともや』 遅刻するぞお』

と歩美が乱入してきた。

『分かったよ！ 起きりゃ良いんだろ。起きりゃ！』

『分かればヨロシイ』

と歩美が腰に手をやり、

どうだ！と言わんばかりに立っている。

俺は素早く制服に着替えて

玄関に向かいながら、

朝食の焼きあがった食パンを

口にくわえた。

『 # & £ % 』

(行ってきます)

と玄関から出る。

門の前で待っていた歩美が、  
寒そうに『遅いぞお』

と言ってきた。

『ごめん』

と言って、二人で駅へと歩き出す。

駅までは歩いて3分〜5分の所にある。

駅へと向かいながら、

歩美が

『もう友達出来た？』

と聞いてきた。

『まだ2日目だぞ！そんな早く出来るかあ』

と俺が言うと、

『あつ、それもそうだよね』

と、本日一発目のエンジェル・スマイル

お互い昨日の出来事は話さないようにしていた。

そんな話しをしているうちに

駅に着いた。

駅に着くと同時に電車が来ていた。

さすが、歩美だなあ  
計算通り！

と、思っていたら

『智也！さすがピッタリだね』

と、歩美が言い出した。

偶然にもピッタリだっただけで計算していた訳じゃなかった。

さっき誉めて損した気分になり、  
ため息が1つしたら、

『おお〜い！遅刻するよお』

と歩美が電車に乗っていた。  
俺も急いで電車に乗り込む。

乗り込むと同時に  
ベルが《チリリリイ〜》と  
なった。

俺は

(ふう〜間に合った)  
と、思っていたら、

『ギリギリセーフだねえ』  
と歩美が言ってきた。

俺はムツとしながら  
開いてる席へと移動する。

その後を黙って着いてくる  
歩美。

二駅で学校がある駅に着く

約10分ぐらいの  
道のりだ！

学校に着くまで  
俺と歩美は世間話で盛り上がっていた。

昨日見たテレビの話や  
これから部活何をやりたいか等そんな話をしていた。

駅に着くと  
改札口で猛が待っていた。

『おはようさん！今日も一緒に登校妬けるね』

と猛が茶化してきた。

『うるせえな』

といつもの挨拶をすると、

『猛君も一緒に行こう』  
と歩美が言つと、

『歩美に言われたら断れねえな』

と猛が待つてました！みたいな表情で言っている。

3人は学校に向かって歩いてみると、後ろからかなりのスピードで走ってくる奴がいる。

『ちょっと待つてー！』

俺たちは振り返ると、

優美がもの凄いスピードで走ってきた。

『ハア、ハア、ハア、私も一緒に登校するッ』

と息を切らしながら言ってきた。

大勢で行った方が楽しいし、  
断る理由も無かったので

俺たちは、『じゃ、一緒に行こうぜ』と返事をした。

優美がなんで足が速いかは、  
後ほど分かるから

今は説明は飛ばして置こう。

こうして、これから4人で  
登校することをこの日から  
誓い合った。

## 2 - 1 (後書き)

沢山の人に読んでもらえて、凄く嬉しいです。まだ初めて書く小説なので、不安がいつぱいです。もっと楽しく書けるように頑張ります。もし良かったら、評価などしてもらえたら、今後に向けて参考にいたしますのでよろしくお願いします。

俺たち4人は無事に学校へとたどり着いた。

『今日も一日頑張りますかと猛が背伸びしながら気合いを入れている。』

俺たちは、

それを見て、笑いながら

『そうだな』と答え教室に向かっていた。

俺と猛と歩美は1年5組

優美は1年3組だった。

『なんで私だけ仲間外れかなあ。私も歩美達と一緒にのクラスが良かった。』と言ってきた。

俺たちは

『そうだよなあ！一緒だったら良かったのになあ』

と笑いながら話す。

それを見た優美は『ズルい』

と膨れたような表情をしていた。

この時俺は、こんな日がいつまででも続けば良いなあと思っていた。

玄関に入り、靴から上履きに

履き替えようとした時、

廊下の方で騒いでる声が聞こえた。

『なんだ？なんかあったのか？』

と歩美と猛の顔を見たが

2人ともさあ〜？みたいな顔をする。

『なんだろう？行ってみよう！』

と言ってきたのは、なんでも興味を示す優美だった。

優美が俺と歩美の手を引つ張る。

俺たち4人は、

騒ぎがある所にやってくると、壁に張り紙が張ってあった。

そこに書いてあったのは、

【大スクープ】

《今年度の入学生の中に違法な手段で入学した者が居たそうだ！それは果たしていかなる奴か見つけ次第、通報してやる》

と言うと張り紙が張っており、俺の背中に冷や汗が出てきた。そんな俺をみた歩美は

『誰がこんなイタズラを！そんな人居たら学校側が許すはず無いのにね。智也行こう！』

と放心状態な俺の手を引つ張っていく。

その時、何がなんだか分からなくなっていた。  
教室に着き、

自分の机に座るなり  
拍子抜けしてしまった。

『なんで、俺がこんな事になるんだ？』

と呪文のように言っていたらしい。

それを聞いていた歩美が

『単なるイタズラよ！気にすること無いって 私が守ってあげる』

と言って、おきまりのエンジェル・スマイル！

この時ばかりは、

さすがの俺でも効いてしまった。

『ありがとう！でも大丈夫。歩美に迷惑かけないから』

と言つと、

『迷惑だなんてそんな事無いよ！いつも智也には力になって貰ってるから、こう言う時は私の番』

と、歩美から嬉しいお言葉！

俺がニヤケていると、

『何、ニヤニヤしてんだよ』

と猛がまた茶化してきた。

『誰もニヤケてねえよ』

と俺は誤魔化すように言っただけだ。

そんな会話をしていると、

【ピンポーン　ピンポーン】

『1年5組　神崎　智也君　大至急！職員室に来て下さい。』  
とアナウンスが流れた。

俺は、

（やっぱりなあ）

と思い、教室から出て行くとした時に、ふと歩美の方をみた。

歩美は

不安そうな表情をしていた。

俺は、すかさず親指を立てて、グーのポーズをして職員室に向かった。

嫌な予感を胸に抱きながら、  
職員室へと向かう。

職員室のドアの前に立ち、  
何とも言えない気持ちになっていく。

(大丈夫！今回もうまく行くよ)

と自分に言い聞かす。

ドアに手をかけようとした時、  
中から話し声が聞こえる。

『だから、言ったじゃないですか！問題が起きますよと！』

その声の主は、生徒指導部の田中先生だった。

気合いを入れて職員室のドアを開けた。

『失礼します』

と入るなり、

田中先生がもの凄い勢いで  
こっちに迫ってくる。

『君は！誰かに漏らしたのか？朝、廊下に張り紙は見たのか？』

と怒りがひしひしと感じるくらいの剣幕で聞いてきた。

俺は思い当たる人物はすぐに

出てきたが、疑いたくないと思ってとっさに嘘をついた。

『誰にも話してません!』

と言つと、

『嘘をつくな!おまえ以外居ないんだよ!』

と凄い迫力で先生が言う。

『自分が言ったと言う証拠あるんですか?』

と聞くと先生は黙り込んでしまった。

そこに校長先生登場!

『おふぉん!智也君と言ったかな?』

『はい...?』

『黙つていようとは思っていたのだけど、このような事になってしまったから困っているんだよ。』

『僕本当に誰も言っていないです!』

『それはどうでも良いんですよ。問題は、このことが周りに知られてしまった事です!それで考えた。君をこれから我々の手助けし

『てもおつと!』

『それは、どついつの意味ですか?』

『簡単な事です。この事実を発表した物を発見してもらおつと!断れば、退学処分になります。』

と、校長が話してきた。

俺はもちろん退学になりたくなかったので、そくこの答えを!

『やります!』

と答えると校長は満面な笑みで『話はまとまりましたね ふおっふおっふお』

と校長室に戻っていった。

それを聞いていた

田中先生は

あっけに取られた感じで

『もう教室戻っていいぞ』

と言ってきた。

俺は

『わかりました。ありがとつごびいます。』

と言って職員室から出て行った

## 2 - 3 (後書き)

歩美の視点から書きますのでご了承ください

今日から智也と一緒に  
登校する。

智也は中学の時から朝が弱く、  
毎日と言って良いほど  
遅刻の常習犯なの！

だから私が起こしに行つてあげなきゃ！

と朝の準備しながら、  
ルンルン気分で登校の準備をしていた。

智也の家の玄関の前に立つと、  
なんのうち、智也のお母さんの声が聞こえる。

『智也！いい加減起きなさい。』

ど起こしてる真っ最中だ！

（相変わらず智也、変わってないんだ）

と思いつながら、インターホンを『ピンポーン』

と押すと、智也のお母さんが

『はい ちよっと待っててね』

と明るい声で玄関に向かってくる。

玄関のドアを開け、私を見るそばから

『歩美ちゃん おはよう！バカ息子起こしに来てくれたの？ありがとっね！』

と明るく挨拶をしてきた。

私は

『やっぱり、起きないんですか？』

と聞くといつもの事！！

みたいな表情で苦笑いしていた。

(よぉ〜し、私が起こしてきてやるっ)

と気合いを入れて、

智也の部屋へ向かう。

『お邪魔します』

と一声かけて家の中へ

常識は守らないと

智也の部屋は二階

部屋へ向かい階段をタツシュで駆け上る

『ドン・ドン・ドン』

さらにスピードをあげた

『ドン・ドン…ドテンツ』

私は調子に乗ってスピードをあげたら、一段踏み外しちゃった

膝から崩れ落ちちよいと痛めたらしい…

(智也の家で転げるなんて恥ずかしいなあ)

と思い、何事も無かったように智也の部屋の前に立つ。

ちよつと膝の確認をし

平然を装い、思いつきドアを開けた。

私は

『いたかった…！もう、ともや』 遅刻するぞお』

と智也に投げかけていた。

『分かったよ！起きりゃ良いんだろ、起きりゃ』

と言ってきた。

私は心の中で

(凄い…！私の言葉が効いた)

と思いながら、手を腰に当てながら

『分かれば、ヨロシイ』

と自慢げに言っちゃった！

その後、階段を降りて

智也のお母さんに

『行ってきます』

と言つと

『歩美ちゃん、気を付けて行くんだよ』

と優しいお言葉を

『は〜いつ』

と返事して、門で待っていた。

4月とは言え、まだ寒い。

門で待ちながら、色んな事を

考えていた。

これからの事、智也の事、あの入学届けが誰の仕業なのか等

考え込んでいたら、

玄関のドアが思いつきり、

開き、智也が出てきた。

智也の顔を見て

何故かホツとする私が出た。

『遅いぞお』

と自然と口にしてた。

智也は、口にしていたパンをとり、

『ごめん』

と一言だけ言っつて、駅へと歩き始めた。

私も置いてかれないように後ろをついて行く。

駅まではそんなに遠くないけど朝で智也はテンションが低かった

沈黙で駅へと向かう2人。

私はそんな雰囲気が好き嫌だったため、何か話題を探した。

何も思いもつかず、ありきたりな質問を

『もう友達出来た？』

と言う問い掛けしか出てこなかった。

そしたら、智也が

『まだ2日目だぞ！そんな早く出来るかあ』

といつものように智也が言ってきた。

それを見て私は

『あつ、それもそつだよね』と笑いながら話す。

(なに言ってるんだろう？私！でも昨日の事気にしてないよっだから良かった)

と思いながら、駅に向かった。

駅に着くと、  
もう電車が来ていた。

私は心の中で  
(ナイスタイミング！)  
と叫んでいた。

パッと智也の方を見ると、  
私をじっと見ている。

(そうか！智也は電車の来る時間把握していて、あの時間まで寝ていたんだ！さすが、智也)  
と思い、

『智也！さすがピッタリだね』  
と誉めてみた！

そしたら、

なんかため息を1つ吐いていた

（えっ？智也、把握しているんじゃないんだ！まあ、結果オライと言う事で）

と思い、私は電車の中に入っていく。

智也の方を向くと、まだ何かを考えている。

（なにを考えているんだろう？やっぱり、昨日の事なのかなあ？大丈夫かあ、智也）

と思っていたら、駅の中に

ある時間をみた。後一分ぐらいで電車が発車する。

（まずいつ？！このままでは、智也が遅刻する！）

と思い、大きな声で

『おおーい、遅刻するよお』

と言うと

智也が我に返った表情をみせ、慌てて電車に向かってくる。

智也が乗るのを見計らっていたかのように、乗った瞬間

『ジリリリリイ〜』

と発車の鐘がなる。

息を切らして乗ってきた智也をみて、私は笑みがこぼれながら『ギリギリセーフだったねえ』

と言ったら、智也が一回深呼吸して、ムツとして空いてる席の方へ歩いていく。

（智也、照れてるな！）

と思いつつ、私も智也の後をついて行く。

## 215 (前書き)

更新遅くなってすみませんでした。もっと早く更新できるように頑張ります。

智也とたわいもない話で  
学校がある駅へと向かう。

私はこの時、

このまま時間が止まれば、良いと思っていた。

『次は、石塚駅、石塚駅です。』

と現実に戻される声が響いた。

この駅が私たちが降りる駅だ。

私たちは降りる準備をして

改札口に向かう。

改札口の方へ歩いていくと、  
ある人物が立っていた。

それは、猛だった

猛の方へ歩いていく

『おはようさん！今日も一緒に登校妬けるねえ』

と猛が茶化してきた。

ちよつと私は嬉しくて、智也の方を向いた。

その言葉に対し、智也が

『うるせえなあ』

と満更でもない表情でいつものように返していて、

私はそれを見て、また嬉しくなった。

気分もハイテンションになり、『猛君も一緒に行こう』

と言つと、

猛は、

『歩美に言われちゃ、断れねえなあ』

と嬉しそうに言ってきた。

登校は、

大人数で行った方が楽しいよねえ

と思いつながら、智也と猛の間に入りながら、学校までたわいもない話をしながら歩いていると

猛スピードで

走ってくる人が近づいてくる。

『ちよつと待って』

と言つ声が聞こえ、

3人は声のする方へ振り向くと走ってくるのは、優美だった。

『ハア、ハア、ハア、私も一緒に登校するッ』

と優美が言ってきた。

私は、みんなで行くの賛成

と思い、ルンルンツと二人を

見ていたら、

『じゃ、一緒に行こうぜ』

と気持ちを察してか

智也が言ってくれた。

優美は、

小学校、中学校と陸上部に入っていて、毎回と言って良いほど選ばれるの！

主に出ている競技は

100メートルや200メートル種目が多いんだな

だから、スピードは凄くて

しかも早い！！

そんな優美を推薦しない訳なくこの薔薇学に陸上推薦で入ったの！

体は鍛えているけど、

美人だよ

優美の紹介はこの辺にして！

そんな優美もこれから  
一緒に登校する事を約束し、  
4人で登校する事が決まった。

私たち4人は  
たわいもない話しながら  
学校に向かい

到着すると

猛が

『よおしくし一日頑張りますか』  
と背伸びしながら、  
気合いを入れていた。

私は笑いながら智也の方を  
見ていた。

智也も笑いながら、  
『そうだなあ』

と猛に言ったのをみて  
凄く幸せを感じた。

そんな話をしながら  
下駄箱に向かう。

向かっている最中に  
優美が

『なんで私だけ仲間外れかなあ〜！私も歩美達と一緒にのクラスが良

かったなあ〜』

と、朝からボヤキ始めた。

そんな優美をみて、

『そうだよなあ、一緒だったら良かったのになあ』

と、智也と猛が言って笑った。

すかさず、優美が

『ズルい〜』

と膨れた表情で言っていた。

この時、私は

(本当だよね！先生のイジワルツ)

と思っていた。

でも私もみんなと一緒にいるこの時間が幸せだった。

下履きから、上履きに履き替える最中廊下から、騒いでる声が聞こえた。

智也が

『なんだ？なんかあったのか？』

と聞いてきたが、私にはさっぱり見当もつかず、

猛の方を見たが、猛も見当もつかないような表情をしていた。

そんな中、そんな空気を打ち破る人物が

『なんだろう？行ってみよう！』

優美だった。

優美は、昔からなんでも興味津々ですぐに頭を突っ込みたくなる性格！

良く私は優美に振り回されていた苦い思い出が…\*

優美は、

私と智也の手を引っ張り、騒ぎがある方へ走っていく。

そこで

私たちは目が点になってしまった。

【大スクープ】

《今年度の入学生の中に違法な手段で入学した者が居たそうだ！それは果たしていかなる奴か、見つけ次第、通報してやる！！》

と言う張り紙があった。

私は、

ヤバいつ！！

と思い、智也の方を即座に向くと

なんのうち、放心状態に…

私はその場を切り抜ける為、

とっさに

『誰がこんなイタズラを！そんな人が居たら学校側が許すはず無いのにね。智也行こう』

と、言つて智也の手を取り  
足早に引つ張つていた。

智也の手を引つ張りながら、私は平然を装つていたが、  
かなり心臓バクバクと  
今にも飛び出しそうだった。

智也や引つ張られながら、  
『なんで俺がこんな事になるんだ』  
と呟いていた。

私は無我夢中で  
教室まで一目散に向かつていた。

教室に入り、  
智也の席に智也を座らせると、拍子抜けたように  
ドスツと座り、まだ状況が掴めないようだった。

そんな智也をいつまでも  
見たくなかったので、

『単なるイタズラよ！気にすること無いって 私が守ってあげる』  
と渾身の笑みで智也を励まそうとしたら、

『ありがとう！でも大丈夫。歩美に迷惑かけないから』

といつも通りの智也に  
戻ったように見えた！

その言葉を聞いて、  
すかさず

『迷惑だなんてそんな事無いよ！いつも智也に力貰ってるんだから、  
こう言う時は私の番』  
と言つと

智也も私も照れくさくて  
笑っていたら、

後からやってきた猛に  
『なに、ニヤニヤしてんだよ』

と、智也に茶化してきた。

智也はいつもの風格を取り戻し、  
『誰もニヤケてねえよ』  
と猛に言うのを見て、  
私はホッとしていた。

そんな話でみんなが  
安心しきった時だった…。

いきなり校内放送が流れた。

【ピンポンパンパン】

『1年5組 神崎 智也君 大至急！職員室に来て下さい。』

と流れた。

私は凄く不安になり、

智也は深呼吸を一回して、

教室から出ていこうとする。

私はそんな智也の後ろ姿を目で追っていたら、

智也も私の視線に気づいたらしく、私に目を向けた。

その時の智也の顔は、

何も飾っていない素直な笑顔だった。そして私に、

（大丈夫 すぐ終わらしてくるから！）

と言っているかのように

親指を立てて、グーとしてきたそれをみて

私は少し安心した。

智也と行き違いに

淳子先生が入ってきた。

『はあ〜い！みんな席に座って』

と、昨日のように明るい先生だ。

私は、智也の事がまだ心配でいたたまれなかった。

そんな私の気持ちを悟ったかのように、手紙が回ってきた。

(なんだろう?)

と思い、手紙を開けてみたら  
それは、猛からだった!

《歩美ちゃん、大丈夫か? 智也の事だから、上手くやるに決まっているから、大丈夫! 今までもそうだったじゃん それに俺の親友だぞ! こういう修羅場は何度も切り抜けてきた。だから安心なってる!》  
と猛からの励ましの手紙だった。

私は、凄く嬉しくなり涙がこぼれそうになっていた。

私も猛にお礼の手紙を書いている最中、  
『この問題を藤崎さん解いてみて!』

と淳子先生が私を指してきたが、私は手紙を書いている事に  
夢中になり、聞いてなかった。

淳子先生が異変に気づき、  
私の席に近づいてくる。

その距離、2メートル

智也がいたら、先生が来たのを教えてくれるが、今日はいない。

さらに先生は近づいてくる。

私はまだ近づいてくるのを知らなかった。

とうとう、私の隣に立って

淳子先生が私の耳元で

『……………』と言ってきて、

私は嬉しくなって飛び跳ねたかった。

でも、授業中と言うこともあり、我慢をした。

なに言われたかは内緒

先生に小声で、

『教えてくれてありがとうございます』

と言うと、淳子先生もウィンクをして、教卓に戻っていった。

一気に不安が無くなり、

その後は、いつものように淳子先生と明るく授業を受けられた。

## 217 (後書き)

皆さん沢山の人に読んで貰えてとても嬉しいです。この次からは、智也の視点からです。探偵智也がどんな動きをするか、楽しみにして下さい。

校長先生から、

『犯人探せ』

と言われた俺は、職員室から出て教室に向かいながら、色んな奴の顔を思い出していた。

猛に…優美…、

そして、一番疑りたくない…：…歩美

(歩美はそんな事しない…：と願いたい！)

と思っていた。

まだ、教室では淳子先生の数学の授業の最中だった。

教室のドアをそおーと開け、

自分の席に戻ろうとしたら、

『そのコソドロ君、ちゃんと戻ったら、言ってきたさい！』  
と淳子先生に指されてしまった！

『あつ…：…すみません。今戻りました。』

と言うと、恥ずかしくなり苦笑いしていたら、

先生が目で合図してくる。

俺は、んっ？と思い、

先生が合図を送る方に目をやると、歩美が満面の笑みでこちらを見ていた。

今に目泣き出しそうな表情だった。

『ごめん！心配かけて』

と歩美に小声で言うと、

『もう、女の子を泣かしちゃいけないんだぞお …… なんちゃって大丈夫だったの？』

と聞いてきた。

俺は職員室で言われた事を言えるまでなく、嘘をついた。

『ああ、大丈夫だった！俺に親が渡すもの有ったみたいだったが、忘れていたみたいで持ってきてきたんだよ』

と言つと

納得いかない表情で

『ふん、そうだったんだ。』

と歩美が言つて、

またノートに授業の内容を映し出す。

俺は、1つ深呼吸して授業に参加した。

【キーンコーンカーンコーン】

と、チャイムが鳴った。

『ウワァ〜終わった、終わった。』

と背伸びして言っていると  
歩美が近づいてきた。

『智也、部活何するの?』

と歩美が聞いてきた。

俺は、別にやる事ないので

『まだ決まってるないなあ〜』

と言うと

『あ、そうなんだ』

と歩美が嬉しそうに言ってきた。

『何か歩美はやりたい事あるのか?』

と聞くと、

『それじゃ、今日の放課後一緒に付き合っ  
て』

といかにも待つてましたと言わんばかりの笑顔だった。

今日の授業が終わって、

放課後、歩美のそばに近寄ったら

『ちゃんと、覚えてくれたんだ』

と言ってきた。

俺は、膨れ面になり

『別に帰っても良いんだけどなあ』

と言つと、

『ゴメン×2』

と言ってきたのを見て、

俺は笑みがこぼれた。

どこに行くのか分からずじまいのまま歩美の後を着いて行く。

連れてこられた場所は、

体育館だった。

『おい、こんな所で何すんだよ?』

と聞くと、

歩美が一つ咳払いをして、

口を開いた。

『今回、智也を呼んだ理由は…』

俺は、その言葉を聞いてあっけにとられてしまった。

『私も力になるから!』

と歩美がまた付け加えてきた。

俺は何がなんだか分からなくなり、

歩美を置いて、体育館から外に向かって走り出していた。

歩美が何故？

どうして詳しく知ってるんだ！

やっぱり、犯人は歩美なのか？

等を考えながら、とにかく一人になりたかった。

歩美が言った言葉

『今回、智也を呼んだ理由は、智也が校長先生に今日の張り紙張った犯人捜すように言われたでしょ。それで、私も一緒に探そうかなあ〜と思って！』

『1人より2人の方が良いでしょ』

俺は、教室に戻ってきた時はそんな話してないのに、何故あんな詳しく知ってるんだ？

と考えながら、がむしゃらに走った。

屋上まで駆け上がり、屋上のベンチに腰掛ける。

一人で途方に暮れていると、携帯電話がなった。

【愛してるって、言ったのは〜】

と俺の好きな歌手の着うたがなった。

その着信に載っている名前を見て、出るか出ないかで葛藤していた。

そこに載っていたのは、

俺が血相をかいて走って行って心配していた歩美だった。

冷静を装い電話に出てみた。

『はい、もしもし』

『歩美だけど、驚かせてごめんね。ちゃんと、話したいから会えるかな？あんな事いきなり言ったら驚かせちゃうよね。本当に悪い事をしたと、私凄く反省してる。だから、会ってちゃんと話したいの』

『ちよつと時間を貰っても良いかな？』

『分かった。私待ってるから！あの場所で』

【ブー、ブー、ブー…】

電話切った後でどうすれば良いか、分からなかった。

俺は、ここに居ても何も始まらないと思い、とにかく約束の場所に向かって行く事に決めた。

約束の場所とは、  
いつも帰りに時間がある時、  
寄り道する喫茶店「アーリン」なのだ。

そこに入ると、  
マスターが

『いらっしやい、あつ、智也君歩美ちゃんあそこにいるよ。』  
と何も言わなくても、

案内してくれる。

俺は、歩美のいる席に向かう。

『お待たせ……』

と言つと、

俯いていた歩美が顔を上げ、

こちらを向く。

『智也、ごめんね。』

と話始める

『私、智也が教室出て行つてから、不安で不安でしようがなかった。授業も身に入らず、どうしようもなかったの。そんな時、猛君が励ましてもらつて、凄く嬉しくて私、お礼の手紙を書いていたの。そしたら、敦子先生に見つかっちゃつて、正直凄く怒られると思つていて、怖かつた。でも先生は怒らず、耳打ちしてきて、こう言われたの！大丈夫よ 智也君は。犯人探しの探偵さんになるから。今は校長と話してるんじゃない と、言われて、嬉しかつた。それで、智也が帰つてきたから私は力にならなくちゃと思つたの。だから、体育館に呼んで誰もいない所で言おうと決めていたんだ。それが、こんな結果になつちやつて、本当にごめんなさい。迷惑だつたらハッキリ言つてね。』

と、一気に歩美が言つてきて

俺は、何も言葉に出来なかつた。

俺が、黙って座っていると

今にも泣き出しそうな表情を見せる歩美

俺は、考えに考えついた答えを言う。

『俺は歩美がその言葉を聞いて犯人かと思ってしまった。でも今の言葉を聞いて、分かった。おれは、歩美が犯人って思いたくないし、疑りたくない。だから、今の言葉を聞いて、信じる事に決めた。俺の方こそ、走って逃げてごめんな。』

と言うと、目に涙で潤わせながら、エンジェル スマイルをしてきた。

なんか、久しぶりに見た気がして、俺も嬉しくなった。

なんだかんだとあったが、

また前みたいなの仲に戻り、マスターに俺と歩美は

『お騒がせしました。御馳走様でした。マスター、また来るね』

と言って、アーリンを後にした

お互い複雑な心境になりながら、駅へと向かう。

俺はこの雰囲気がとても嫌で、

『これからもヨロシクなあ！』

と言つと、

歩美も

『うんっ  
』

と言つて俺の手を握つてきた。

歩美の手は、凄く柔らかくてとても温かった。

と同時に、俺の心臓が早くなったのが分かった。

俺は、とっさに手をぎゅっと

握り返した。

歩美はそれが、とても嬉しかったのか、手を振って歩いていた。

いつもより帰りが遅くなってしまった。

もう電車行つてしまった時間だった。

いつものように、ベンチに腰掛け休憩していると、

歩美も隣に座った。

『あと1時間もあるけど、どうすつかあ？』

と聞くと、

歩美は少し悩み、口を開いた。

『智也と一緒にいれればそれだけで良いよ  
』

と言ってきた。

この時、心の中で俺はお笑い芸人の言葉を放っていた。

（惚れてまうやろ）と

ただ座っているだけでも、しょうがないので、自販機に歩いていき、ジュースを買いに行った。

（歩美は何がいいかなあ）

とを考えても思いつかなかつたから、取りあえず一緒のジュースを買って帰る事にした。自販機は、駅から一分の所にあり、そんなに遠くないから、

歩美は駅のベンチに座っていた。

ジュースを持って帰ると、

歩美が若い2人に絡まれていた。

『おねえちゃん、1人？』

『俺たちと遊ぼうよ』

『どうせ、帰ってからもやる事無いんでしょ？』

とナンパされている感じだった。

俺は、歩美の方を見ると明らかに嫌がっている表情を見せていた。

俺は、男2人の元に近寄り、

『嫌がってんだろっ！』

と言つと、

『あゝ！なんだてめえ』

『やっちまおっぜえ』

と粹がる2人に差し置いて

俺は冷静だった。

『歩美、このジュース持つといて！危ねえから離れていな！』

と言つと、歩美は

『う、うんっ』

と言つて改札口の方へ歩いていった。

『格好付けてんな！この野郎』

と1人が殴りかかってきたが、

俺は相手の勢いの力を借りて、顎にパンチを食らわす。

ホームに響きわたるくらいの

【ドウフウ！！】

と鈍い音がなると同時に、

そいつが床に崩れ落ちる。

勿論、一発KO！

その後ろにいた奴も

『舐めてんじゃねーぞ』

と殴りかかってきたが、  
ボディに一発咬まし、  
ハイキックを食らわすと  
その場でのびちまっていた。

『口ほどには大したことねえな』

と手をパンパンと叩き、

歩美の元に近づく。

『智也、喧嘩強いんだね。』

と驚いた表情を見せていた。

『ごめんな。驚かせてしまったよな』

と言つと

『全然、大丈夫だよ』

と歩美が笑顔で言ってきた。

何故、俺がこんなに強いかと言つと実は、子供の頃からテコンドーを習っていて、喧嘩慣れもしていた。

知らない人がいないくらい強くて、猛と一緒に歩いてるだけで、自然と人が避けていく。

猛も空手の段持ちで、  
その強さは、普通の人だったらパンチを寸止めされただけでも倒れ  
ちゃうぐらいだ。

ちよつと、落ち着き  
またベンチに腰を降ろした。

歩美とたわいもない話をしていると、電車が滑り込んできた。

『電車が来たみたいだなあ！よおし、行くかあ』

と言つと、

『うん 帰ろつ』

と歩美が笑顔で言ってきた  
俺の手を握ってきた。

手を握りながら、電車に乗り込み家路へと帰って行く。

俺は、こんな日がいつまでも変わらずに進んでいくと、思っていた。

だが、あんな事件が起こるとは俺も歩美も予想がつかなかった…

いつものように下から、  
俺を呼ぶ声が聞こえる。

『智也〜！いつまでも寝てんじゃないよ〜』

と母の音がする。

『分かったよ！今起きるよ』

と渋々起きて制服に着替える。

着替え終えたと同時に、

『おはようございま〜す』

と歩美がやってきた。

急いで階段を降りて、  
歩美に元へ。

『おはよう 智也！〜』

『おう！おはよう！〜』

いつものように挨拶を交わす。

『じゃ、行ってきまーす』

と俺と歩美は家を出て、駅へと歩いていく。

『今日はかなりダルいなあ』

と歩きながら、呟くと

『何言ってるの！今日は始まったばかりでしょ！気合い入れな』

と歩美が湯を入れてくる。歩美は、昨日あった事を話してこなかった。

駅に着くと、

昨日の男達が待っていた。

俺と歩美は

黙って通り過ぎようとしたら、向こうから声をかけてきた。

『おい、シカトしてんじゃねえよ！』

と言ってきたが、

俺は怠かった為、無視し続けた。

奴らはその態度が、

気に入らなかつたらしく、

腰の辺りから光る物を出してきた。

俺はとっさに

ヤバイッ！？ナイフだあ

と思い、歩美に

（駅の近くに交番があるから、俺が合図を出したら、もうダッシュしろ）

と歩美に告げると、

歩美は小さく頷く。

奴らはそれを知るはずもなく、猛スピードで俺の方に

向かってくる

その瞬間を待っていた。

向かってくる奴の一人に蹴りを腹に一発入り、男が後ろに跳ばされていった。

俺は歩美に

『今だ！』

と叫ぶと、歩美は交番に向かい走り出した。

ナイフを持った男が

歩美が走っていったのに気づき追いかけてよつとした時、

俺は、そいつの首を掴み

『オメエの相手は俺だろ！』

と言うと、

そいつの腕を掴みひねってやると、カランとナイフを落とした。

俺は、どうしても腹の虫が納まらず、顔を思いつきり殴ると

顎にヒットー！

即KOになってしまった。

しばらくして警察が到着！

したが、時すでに事は済んでいた。

警官が、

『何があつたんだ？』

と聞かれ、

事細かに事情を話すと、

『正当防衛だから、何も無かったことに！』

と、見逃してくれて、

倒れた二人を連れていった。

と同時に電車がきて、

「歩美、行こうか！」

と言つと、

「うんっ  
」

と言つて、俺と歩美は初めて手を繋ぎながら、学校へと向かった。

3 - 4 (後書き)

久々に投稿しました。

お待たせしてしまい、スイマセンでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9920f/>

---

high school love life

2010年10月11日23時03分発行